

他動詞としての非能格自動詞と日本語の使役構文*

小林亜希子 (島根大学)

akiko.kobayashi.2005@soc.shimane-u.ac.jp

1. 提案

日本語の使役文は、使役形態素 $-(s)ase$ が動詞句を選択することによって統語的に派生される。¹ $-(s)ase$ は動詞句内にある最上位の項にニまたはヲ格を付与し、「ニ使役」または「ヲ使役」を作る。

(1) a. 太郎が [_{vP} 花子{**に**/ *を} 本を 読**m**] $-ase$ た。

b. 太郎が [_{VP} 野菜{**を**/ *に} 腐**r**] $-ase$ た。

上の例が示すとおり、他動詞 (Vt) が使役化されるとニ使役のみ、非対格動詞 (V_{unacc}) が使役化されるとヲ使役のみが容認される。VtとV_{unacc}の作る統語構造は異なるので、格標示の違いはこの統語構造の違いを反映していると考えてみる。

(2) a. $-(s)ase$ ニ: vP __

b. $-(s)ase$ ヲ: VP __

Vtの拡大投射はvP だが、V_{unacc}はVPまでしか投射しない。² 使役形態素には2種類あり、vPを選択するものはニ格、VPを選択するものはヲ格を付与すると仮定すれば、2種類の使役文は単純に統語構造の違いを反映していると説明できる。

しかし、この分析では次のようなデータをうまく説明できない。

(3) 太郎が [花子{**に**/ **を**} 働**k**] $-ase$ た。

非能格自動詞 (V_{unerg}) が使役化すると、ニ使役・ヲ使役のいずれも可能である。しかし、(2)に従えばニ使役しか容認されないと予測してしまう。

(4) a. 太郎 [_{vP} 花子**に** [_{VP} 働**k**] v] $-ase$ ニ

b. 太郎 [_{VP} 花子**を** 働**k**] $-ase$ ヲ

V_{unerg}は外項を選択するためvPまで投射する。ゆえに、(2a) タイプの $-(s)ase$ とマージしてニ使役を派生することは説明できる ((4a))。一方、(2b) タイプの $-(s)ase$ とマージしてヲ使役を派生するには (4b) の構造を想定せねばならない。すなわち、「働**k**」はこのときV_{unacc}であり、内項のみを選択する、と考えることになる。しかし、V_{unerg}が場合によってはV_{unacc}にもなれるとは考えにくい。

上のようなデータに対応するため、これまでは統語論・意味論両方を合わせた分析がされてきた。³ つまり、2種類の使役には2種類の統語構造が対応するが、どちらの構造を選ぶかは意味的・統語的に制約される。ヲ使役は「被使役者の意志(の存在)を顧慮しない働きかけ」を表すので、(3) を派生する際、花子の働くことを太郎が強制しているのならばヲ使役構造を選ぶ。一方、(1b) において被使役者 (=野菜) の意志は存在しえず、ヲ使役の構造を選択せねばならない(意味的制約)。対して、(1a) で引き起こされる状況は太郎が強制して起こす場合が考えられるので、ヲ使役の構造を選択することは可能である。しかし、そうすると「太郎が 花子**を** 本を 読ませた」となって二重対格目的語制約(DOC)に違反するため、ヲ使役は許されない(統語的制約)。意味的、統語的説明が混在すること、DOCのような根拠の不明確な制約に依存することなど、先行分析には問題がある。また、3節で述べるとおり、経験論的に問題があることも指摘されている。

本稿の提案は、(4b) の構造が実際に存在し、ニ使役・ヲ使役は (2) に示すとおり単純に統語構造の違いを反映しているとするものである。この考えに従えば、格標示のみならず、使役文に関わるその他の統語的・意味的性質についても簡潔に説明ができるが、そのことは2節以降で論じていく。本節では、(4b) の構造が容認されるようにV_{unerg} について二つのことを提案する。

第一に、V_{unerg} は他動詞であると考える。

(5) a. 全てのV_{unerg}は (x, x) の項構造を持ち、内項位置には「内在的に再帰的な (intrinsically-reflexive)」代名詞(SE) が現れる。

b. Danish: Peter skammer/dukker sig. (Cf. Peter mistænker/misunder sig selv.)
 Peter shames/ducks SE Peter suspects/envies SELF
 (Bergeton (2004: 147) より改変)

c. English: He rests Ø. (Cf. He suspects himself.)

d. 日本語: 花子が Ø 働く。 (Cf. 花子が 自分を 責めた。)

Reinhart and Reuland (1993) によれば、(5b) が示すように、ゲルマン、ロマンス諸語では必ず特殊な再帰形(SE)を内項に選択する述語がある。(再帰形が随意的に選択される場合にはSELF形を用いる。) そのような述語の項構造は(x, x)であり、内項が必ず外項と同じものを指すように指定されているという意味で「内在的に再帰的」である。内在的に再帰的な内項はSE形代名詞として表される。この考えを英語にまで拡張したのがBergeton (2004) である。(5c) が示すように、英語のSEは音形を持たない再帰形(Ø)であると考え、ゲルマン、ロマンス諸語とパラレルな分析を行うことが可能となる。

本稿では、日本語のSEも音形ゼロの再帰形(Ø)として具現すると考える ((5d))。また、先行分析ではV_{unerg} の一部が (x, x) の項構造を持つとしているが、本稿では全てのV_{unerg} がそうであると考え。(その理由については3節で述べる。)

第二に、V_{unerg} を含む他動詞は「非対格化」できると考える。

(6) 項構造 非対格化 統語構造 非対格化した構造の認可子

a. 働k (x, x) → (x, x) [VP 花子 働k] + -(r)are/ -(s)ase_ヲ

b. 直s (x, y) → (x, y) [VP 時計 直s] + -(r)are/ -(s)ase_ヲ

いずれの場合も外項が抑圧されて内項のみを選択するようになる。一般的に「受動化 (passivization)」と呼ばれ、受動文の派生の際に起こるとされるが、本稿では同じ操作がヲ使役を作る際にも関わると考える。⁴ 非対格化してできるVPと (2b) タイプの-(s)ase がマージして「太郎が花子を働かせる」「太郎が時計を直させる」のようなヲ使役が派生する。

(6a) は (5d) と異なり、内項が SE(Ø) でないことに注意されたい。外項と必ず同じものを指すために「内在的に再帰的」である内項は、外項が現れない環境で「再帰的」ではありえない。従って、非対格化した場合には、内項位置に普通の名詞句が現れる。

以上の提案に従った場合、(4a,b) のより正確な構造は次のようになる。

(7) a. 太郎 [VP 花子₁に [VP Ø₁ 働k] v] -ase_ニ

b. 太郎 [VP 花子_ヲ 働k] -ase_ヲ

本分析に従ってV_{unerg} からニ使役・ヲ使役を派生すると、先行研究で提案されてきた構造では見られない性質が少なくとも2つあることになる。

(8) a. ニ使役: ニ格の被使役者に束縛される音形ゼロの再帰形がある。

b. ヲ使役: ヲ格の被使役者は動詞の内項である。

提案された分析により、使役文のさまざまな性質が説明できることを以下論じていく。

2. 統語的特徴

2.1. 二重対格目的語制約 (DOC)

(1a,b) と (3) (=7a,b)) に見られる格標示のパターンは (2) によって簡潔に説明することができる。また、次の非文を排除するために先行研究が用いてきた DOC も不要となる。

(9) *太郎が [vP 花子を [vP ご馳走を 作r] v] -ase_二 た。

Vt の拡大投射は vP なので、(2a) タイプの-(s)ase とマージし、二使役を派生する可能性しか存在しない。

2.2. 被使役者と遊離数量詞(FNQ)の認可

隣接しない位置にあるFNQを認可できるかどうかは、使役の種類により異なる。⁵

(10) a. ??太郎が 学生に 図書館で 三人 働k -ase た。

b. 太郎が 学生を 図書館で 三人 働k -ase た。

ネイティブ・チェックしたところ、(10a) の方が容認度が落ちることが分かった。容認度の差は本分析に従えば簡潔に説明できる。(Miyagawa (1989)に従って、相互 c-統御が FNQ の認可条件であると考える。)

(11) a. [vP 学生 [vP 図書館で Ø 三人 働k] v] -ase_二

b. [vP 図書館で 学生 三人 働k] -ase_一

(11a) のとおり、二格を付与される被使役者「学生」は動詞の外項として生起するので、FNQ「三人」を認可できない。従って (10a) は容認度が下がる。対して、(11b) のとおり、ヲ格の被使役者は(表層位置はともかく)動詞の内項として生起するので、FNQ を認可することができる。従って (10b) は容認される。

2.3. 二重使役化

日本語の使役化は複数回起こりうるということが Shibatani (1976) などで指摘されている。

(12) 太郎が 次郎に 一郎を 歩 k -ase た。 (Shibatani (1976: 244))

上の文は次のようなステップで統語的に派生される。⁶

(13) a. [一郎 歩 k]

b. [次郎 [一郎を 歩 k] -ase] (ヲ使役化)

c. [太郎 [次郎に [一郎を 歩k] -ase] -(s)ase] (二使役化) (ヲ→ニ)

すなわち、(ヲ→ニ)の順で二回使役化が起こっていることになる。(使役形態素のうち一つは PF で削除されると考える。)

どのような使役の組み合わせが可能なのか、先行研究では論じられていない。色々な組み合わせを作って容認度をチェックしてみると、次のような結果が得られた。

(14) a. *太郎が 次郎を 一郎を 歩 k -ase た。 (ヲ→ヲ)

b. *太郎が 次郎を 一郎に 歩 k -ase た。 (ニ→ヲ)

c. ??太郎が 次郎に 一郎に 歩 k -ase た。 (ニ→ニ)

d. ??太郎が 次郎に 一郎に 本を 読 m -ase た。 (ニ→ニ)

(14c,d) において容認度が多少落ちるのは、次の文と同じ理由によると考えられる。

(15) 太郎が [花子に 次郎{??}に/ と] 面会 s] -ase た。

ニ使役が一度起こっているが、その結果ニ格を持つ句が連続すると容認度が落ちる。⁷ (14c,d) の容認度の低下も同じ理由によるもので、二重使役化そのものがブロックされているのではないと考えると、可能な二重使役の組み合わせは (13) の(ヲ→ニ)、(14c,d) の(ニ→ニ)のみ、ということになる。どうしてこの2つのみが許されるのか、本分析から説明することができる。

まず、初めにヲ使役が起こる場合の派生を考えてみる。ヲ使役化とは、(非対格化された) VP と -(s)ase_ヲ がマージすることである ((16a) → (16b))。

- (16) a. [VP 一郎 歩k]
 b. [vP 次郎 [VP 一郎を 歩k] -ase_ヲ]
 c. [vP 太郎 [vP 次郎に [VP 一郎を 歩k] -ase] -(s)ase_ニ]

(16b) が示すとおり、ヲ使役化の結果できる構造は vP なので、これがもう一度使役化されるのならば、ニ格を付与する (2a) タイプの-(s)ase が現れるはずである。従って、(16c) のような(ヲ→ニ)の組み合わせのみが可能な派生パターンである。

次に、初めにニ使役が起こる場合の派生を考えてみる。今度はvP と -(s)ase_ニ がマージすることで被使役者にニ格が付与される ((17a) → (17b))。

- (17) a. [vP 一郎 [VP Ø 歩k] v]
 b. [vP 次郎 [vP 一郎に [VP Ø 歩k] v] -ase_ニ]
 c. [vP 太郎 [vP 次郎に [vP 一郎に [VP Ø 歩k] v] -ase] -(s)ase_ニ]

(17b) が示すとおり、この結果できる構造もvP なので、もう一度使役化が起こるのならば、また -(s)ase_ニ とマージすることになる。従って、(17c) のような(ニ→ニ)の組み合わせのみが可能な派生パターンである。

つまり、最初の使役はヲ・ニいずれでも良いが、その結果できる構造は vP になるので二回目の使役はニ使役のみが可能である。ゆえに(ヲ→ニ)、(ニ→ニ)のみが可能な組み合わせとなる。

2.4 かき混ぜ

2.4.1 被使役者を越えるかき混ぜ

被使役者を越えるかき混ぜの容認性は使役の種類によって異なることが、Miyagawa (1999) で観察されている。

- (18) a. 太郎が 公園へ₁ 子供を t₁ 行かせた。
 b. ???太郎が 公園へ₁ 子供に t₁ 行かせた。 (Miyagawa (1999: 249))

ニ格の被使役者を越えるかき混ぜは容認されない。Miyagawa は自身の提案する次の使役構造をもとに容認性の違いを説明する。

- (19) a. [IP 太郎が [IP 公園へ₁ 子供を t₁ 行k] -ase た]
 b. ???[IP 太郎が [VP 公園へ₁ 子供に [IP PRO t₁ 行k] -ase] た]

ヲ格の被使役者は埋め込み IP 中に現れるため、それを越えるかき混ぜは IP 付加移動であるのに対し、ニ格の被使役者は-(s)ase の項として現れるため、それを越えるかき混ぜは主節 VP への付加移動である。Miyagawa は後者の移動が非文法性を引き起こすとしている。

本分析においても、同様に容認度の差を説明できる。本分析に従った場合の構造は次のようになる。

- (20) a. 太郎が [VP 公園へ₁ 子供を_{t₁} 行k] -ase_→ た
 b. ??太郎が [vP 公園へ₁ 子供に [VP Ø_{t₁} 行k] v] -ase₌ た

ヲ格の被使役者は動詞の内項、ニ格の被使役者は動詞の外項位置を占める。従って、それらを越えるかき混ぜの着地点(付加位置)は異なるはずである。VP 付加は容認できるが vP 付加は容認されないなど、かき混ぜの制約を新たに立てる必要があるが、Miyagawa 同様、付加位置の違いが容認度の違いを生むと説明することができる。

2.4.2 被使役者のかき混ぜ

次に、被使役者そのもののかき混ぜることができるかどうか考えてみる。

- (21) a. 花子を₁ 太郎が_{t₁} 踊らせた。
 b. ??花子に₁ 太郎が_{t₁} 踊らせた。
 c. 花子に₁ 太郎が_{t₁} パンを 焼かせた。

(21a,c) が示すとおり、かき混ぜ操作自体は可能である。ただし、(21b) のように V_{unerg} を二使役にした場合、ニ格の被使役者を動かすと明らかに容認度が落ちるといふ観察結果が得られた。⁸ 本分析では、上の例文はそれぞれ次の構造を持つことになる。

- (21)' a. 花子を₁ 太郎が [VP t₁ 踊r] -ase_→ た
 b. ??花子に₁ 太郎が [vP t₁ [VP Ø_{t₁} 踊r] v] -ase₌ た
 c. 花子に₁ 太郎が [vP t₁ [VP パンを 焼k] v] -ase₌ た

(21b,c)' でのかき混ぜはまったく同じものなので、(21b)' の問題はかき混ぜそのものにあるのではない。(21a-c)' の構造を比較すると、(a,c) には見られず、(b) においてのみ見られる特徴が一つある。すなわち、(21b)' の「花子に」は音形ゼロの再帰形(Ø)を束縛している。これが容認度の低下に関わっていると考え、次の制約を提案する。

- (22) 音形ゼロ要素の束縛子のかき混ぜることができない。

この制約が正しければ、(21b) においてのみ容認度が落ちることを説明できる。

(22) を支持する独立した証拠として、次のデータを挙げる。

- (23) a. ??花子に₁ 太郎が_{t₁} [PRO₁ 踊るよう] 命じた。
 b. ??花子を₁ 太郎が_{t₁} [Ø₁ 母親]-の前で 踊らせた。
 c. ??花子に₁ 太郎が_{t₁} [Ø₁ 母親]-の前で パンを焼かせた。

(23b,c) は(21a,c) に「母親の前で」を付け足したものである。この追加自体に問題はないが、「花子の母親の前で」という解釈をしようとする容認性が落ちると判断する人が多かった。⁹ (かき混ぜが起こらなければ「花子の母親」という解釈は問題なく得られる。) (23b,c) 中の「Ø」は「母親」が選択する音形ゼロの項を表している。Barker (2000) などによると、「母親、娘、頭、手」など、あるものとの関係性の中でその意味が成立するような名詞 (relational nouns) は二項述語であり、「誰の」母親 (娘、頭、手) なのかを項として選択する必要がある。

- (24) [mother] = mother-of (x, y)

この考えが日本語にも当てはまるとすると、(23b,c) において「母親」は項を選択する。一見それが見えないのは、音形を持たない代名詞(Ø)を選択しているからである。¹⁰ 従って、(23) の各例文には音形ゼロの項があり、その項とかき混ぜられた要素が同一指示の関係にある。制約 (22) があれば、これらの例文の容認度が落ちることが説明できる。

まとめると、本分析と制約 (22) を採用することにより、(21a-c) に見られるかき混ぜの容認度の

違いが説明される。

3. 意味的特徴

この節では、使役文の意味解釈について考える。

(25) a. 太郎が 花子**を** 踊 r-ase た。

b. 太郎が 花子**に** 踊 r-ase た。

よく言われる意味の違いは次のようなものである。ヲ使役は「花子が踊る」状況が太郎によって強制的に引き起こされることを表すのに対し、ニ使役はその状況の起こることを太郎が許可(容認・黙認)することを表す。日本語の母語話者にとって、この説明は (25a,b) のようにミニマル・ペアを比べた場合には納得できるものである。しかし、ヲ使役、ニ使役の文を個別に取り上げてその意味を考えると、この説明は必ずしも正しくない。

(26) 太郎が 花子**に** 本を 読 m-ase た。

(27) a. 彼は 嫌がる妹**に** ベッドで 寝 -sase た。

b. 彼は ベッドで寝たいという妹**を** ベッドで 寝 -sase た。

(Inoue (1976), Tonoike (1978: 6) より引用)

(28) (もう馬を連れて帰る時間だったが、あまり愉快そうに囲いの中を走っているの)
太郎は そのまま 馬**を** 走 r-ase た。

(Kitagawa (1974), Tonoike (1978: 6) より引用)

Vtを使役化するとニ使役が義務的であるが、この使役文は強制・許可いずれの場合をも叙述することができる ((26))。V_{unerg} を使役化した場合も同様である。文脈などから強制的な使役が明らかであってもニ使役で叙述できる ((27a))。逆に、許可的な使役が明らかであってもヲ使役で叙述できる ((27b), (28))。

また、V_{unerg} のニ使役には次のような意味的制約もあると思われる。

(29) *太郎は そのまま 馬**に** 走 r-ase た。

使役の意味タイプに関係なく、人間以外の被使役者をニ格で標示することはできない。¹¹

従って、次の疑問に本稿の分析がどのような解答を与えるか、以下論じていくことにする。

(30) a. ニ使役、ヲ使役の本当の意味の違いは何か？

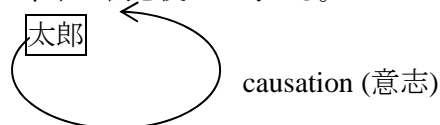
b. 動物の被使役者がニ格標示できないのはなぜか？

Levin and Rappaport Hovav (1995) は、働きかけ (causation) のタイプには違いがあると指摘した。動詞の語彙的意味に含まれる働きかけには(少なくとも)「外的」「内的」なものがある。V_{unerg} の意味の中には内的な働きかけが含まれる。

(31) With an intransitive verb describing an internally caused eventuality, some property inherent to the argument of the verb is “responsible” for bringing about the eventuality. For agentive verbs such as *play* and *speak*, this property is the will or volition of the agent who performs the activity. (Levin and Rappaport Hovav (1995: 91))

内的な働きかけがどのようなものか、下の例を使って考える。

(32) 太郎が 踊った。



「太郎」は踊る行為をコントロールする行為者でもあるが、そのコントロールを受けて踊る受動者

でもある。コントロールが必ず自分自身に向かうこと、またコントロールが「意志」(または運動神経への命令)という太郎の内側にとどまる力であることから、 V_{unerg} の働きかけは「内的」と言える。

対して、 V_t の働きかけは行為者の外に向かうため、「外的」である。¹²

(33) 太郎が 窓を 開けた。 太郎 $\xrightarrow{\text{causation (物理的操作)}}$ 窓

同じことを少し違った方法で表すと次のようになる。

(34)

	行為者	受動者	変化状態
a. 太郎が 窓を 開けた。	太郎	\longrightarrow 窓	\dashrightarrow (開く)
b. 太郎 ₁ が \emptyset_1 踊った。	太郎	$\xrightarrow{\text{volition}}$ 太郎	\dashrightarrow (踊る)

V_t , V_{unerg} のいずれの意味にも「行為者からの働きかけ」が関わるが、その向かう先が異なる。 V_t の「外的」な働きかけの向かう先、すなわち受動者は行為者の外にある。この意味関係を項構造が反映すると考えると、 V_t の項構造は (x, y) となる。¹³ 他方、 V_{unerg} の働きかけは「内的」なので、その向かう先、すなわち受動者は常に行為者と同じものを指示する。これが項構造に反映されて、 V_{unerg} の項構造は (x, x) となる。1 節で提案した (5a) はこの考えにもとづく。

また、1 節で V_{unerg} が「非対格化」できることも提案したが、その場合の統語構造に対応する意味は次のようになる。

(35)

	行為者	受動者	変化状態
[vp 太郎 踊r]		太郎	\dashrightarrow (踊る)

非対格化により行為者とその内的な働きかけが消える。内項の太郎は意志を持った存在としてではなく、「踊る」状態にあるものとして叙述される。つまり、「太郎が踊る」という状況が、「花が揺れる」「葉が落ちる」などと同じく現象学的に叙述されていると言える。

それでは、 V_t , V_{unerg} , 非対格化した V_{unerg} が使役文に現れるとそれぞれどのような解釈を受けるのか、考えてみる。

(36)

	使役者	被使役者(行為者)	受動者	変化状態
a. 花子が [太郎に 窓を 開け]-sase た。	花子	\longrightarrow [太郎 \longrightarrow 窓]	\dashrightarrow	(開く)
b. 花子が [太郎に \emptyset 踊r]-ase た。	花子	\longrightarrow [太郎 $\xrightarrow{\text{volition}}$ 太郎]	\dashrightarrow	(踊る)
c. 花子が [太郎を 踊r]-ase た。	花子	\longrightarrow	[太郎 \dashrightarrow]	(踊る)

カッコで括った部分が埋め込まれた動詞句と、それが担う意味を表す。いずれの使役文においても、使役者からの働きかけは同じである。つまり、強制的・許可的といった区別は統語上存在せず、文脈や修飾語句から判断されるべきものである。統語構造が反映する意味の違いは、使役者の働きかけがどういう状況に向かうか、である。 V_t が使役化した場合 ((36a))、(i) 太郎が窓を開けるように (ii) 花子が働きかける、という二つの「外的」な働きかけが連鎖を作る。 V_{unerg} が使役化した場合 ((36b))、「外的」な働きかけと「内的」な働きかけが連鎖を作る。すなわち、(i) 太郎が「踊る」意志を持って踊るように (ii) 花子が働きかけを行う。大雑把な一般化をすれば、 V_{unerg} から派生される二使役は、「使役者が、被使役者が意志(自覚)を持ってしかるべき行為を行うように働きかける」ことを表すと言える。

では、 V_{unerg} が非対格化して \exists 使役を形成するときの意味はどのようなものであろうか。(36c) が示すとおり、 \exists 格標示される「太郎」は意志を持つ存在ではなく、「踊る」状況にある受動者として存在する。したがって、太郎が踊る状況になるよう花子が働きかける、という「外的」な働きかけ

が一つだけ関わる。一般化すると、 V_{unerg} がヲ使役を形成するとき、「使役者が、被使役者の関わるしかるべき状況がもたらされるように働きかける」ことを表すと言える。

まとめると、(30a) への答えは次のようになる。

(37) V_{unerg} から作られるニ使役のみ、被使役者が意志(自覚)を持ってある行為を行うように使役者が働きかけることを表す。¹⁴

その他の使役の場合、被使役者の意志(自覚)は存在しないのではなく、言語形式の中に表現されていないだけである。

次に、(30b) について考える。例文 (29) とそれに対応する意味は次の通りである。

(38) *太郎は そのまま [馬_iに \emptyset_i 走r] -ase た。

太郎 → [馬_i volition → 馬] --- → (走り続ける)

太郎は馬が「走る」という意志を持つことを目指して働きかける。しかし、人間と動物が意思疎通できないことを考えると、このような状況は不自然である。ゆえに、動物の被使役者をニ格で標示することはできない。

最後に、(25a,b) について言及しておく。ミニマル・ペアを比べると「ニ使役=許可」、「ヲ使役=強制」のような解釈が得やすくなるのはなぜだろうか。ニ使役の意味の中には行為者「花子」とその意志が含まれ、ヲ使役のほうには含まれない。従って両者を比較すると、ヲ使役文で「花子の意志が記述されていない」ことが「花子の意志が無視されている」ように感じられてしまい、強制的・一方的な使役を表しているように思えるのではないかと考える。

4. まとめ

本稿ではまず、ニ使役とヲ使役は $-(s)ase$ が選択する動詞句の違いを反映するだけのものであると述べた ((2))。非能格自動詞を使役化するとニ・ヲいずれの使役も可能となるのは、その動詞句が 2 種類あることを示している ((7))。その 2 種類の構造を作るため、非能格自動詞の新しい構造を提案した ((5))。提案した分析を用いて、使役文に関わるさまざまな統語的・意味的な性質がうまく説明できることを示した。

非能格自動詞が「隠れた他動詞 (hidden transitives)」であるとはこれまでも指摘されてきた (e.g. Burzio (1986), Hale and Keyser (1993), Kayne (1993), Chomsky (1995))。しかし、どのような内項があり、それがどうして見えないのか、その考えが概念的・経験的にどうサポートされるのかなど、必ずしも明確ではなかったように思われる。本稿では日本語の使役文をもとにしてこれらの疑問に解答を与える試みを行った。本稿での提案が日本語の他の構文、あるいは他の言語データの説明にも有用かといったさらなる可能性の探求は今後の研究課題としたい。

[注]

*本稿は、第 30 回関西言語学会 (2005 年 6 月 5 日、於： 関西大学) で行った口頭発表に加筆・訂正を加えたものである。司会をして下さった吉村公宏先生、貴重なコメントを下さった会場の方々に感謝申し上げます。また、これに先立つ研究会などにおいても、岩倉國浩先生、佐々木淳先生、松原史典先生を始め、多くの方に有益な助言、コメントを頂いた。記して感謝したい。言うまでもないが、本稿における全ての不備・誤りは著者の責任である。

1. 長谷川 (1999), 井上 et al. (1999) 参照。一方, Shibatani (1976), Tonoike (1978), Miyagawa (1999) などは使役形態素が節(S, IP) を埋め込むと考えている。また、使役形態素には-(s)as もあるが、語彙的な使役動詞との区別が難しいこともあり、本稿では論じない。語彙的な使役と統語的な使役の統語・意味論的な違いについては Shibatani (1976), Kuroda (1993) の議論を参照されたい。
2. vP-VP の区別は Chomsky (1995) に従ったものである。Chomsky (2001) での提案に従って vP, VP をそれぞれ v*P, vP と読み替えても本稿の議論は本質的に変わらない。
3. 例えば Kuno (1973), Shibatani (1976), Tonoike (1978) など。
4. (6a) に示すように、自動詞から受動文を派生することも可能であると本分析は正しくない予測をしてしまう(e.g. 「*花子が 働 k -are た。」)。頁数の制約上議論しないが、この非文法性は統語的なものではなく、意味論的な原因によりもたらされると考えている。
5. 隣接する遊離数量詞については先行研究でも言及があるが、容認度の判断が異なる。
 - (i) 太郎が 子供{を/*に} 二人 公園へ 行 k -ase た。 (Miyagawa (1999: 251))
 - (ii) 麻子が 学生{を/ に} 三人 中国へ 行 k -ase た。 (長谷川 (1999: 142))
 (ii) のように容認できる例文を作れることから、(i) の二使役の非文法性は意味解釈に関わるものと考えられる。統語的には、ニ・ヲいずれの格の被使役者も遊離数量詞を認可できる。
6. Kuroda (1993) でも二重使役文についての言及があるが、語彙使役に統語的な使役化がかかるものであるので、本稿では議論しない。
7. 同様の指摘が Kuroda (1993) でも見られる。
8. ただし、「花子に」を強く読むと容認度が上がる。この場合、「花子に」はフォーカス移動したものと考えられる。この節の議論は「意味的に空」の随意的な移動としてのかき混ぜの場合に限定される。下に出てくる例文 (23) の容認性に関しても同様である。
9. 何人かの話者は容認度が落ちないと判断した。この判断には 注 8 のような原因が関わっているのではないかと考える。
10. この \emptyset は「内在的に再帰的な」内項ではなく、単なる代名詞である。日本語では、文脈から項の内容が特定できる場合、音形ゼロの代名詞を用いることが可能である。
 - (i) 太郎が \emptyset 書いた。 (ii) 毎日 \emptyset 学校に 来ている。
 再帰形の \emptyset と異なり、代名詞 \emptyset の出現は随意的であり、局所的な束縛関係も必要ない。
11. 動物を「人間扱い」している場合は容認度が上がる (松原史典先生のご指摘による)。
 - (i) 太郎は そのまま (馬の)アオに 走らせた。
 動物を名前と呼んで「仲間」扱いにする、あるいは動物が人間と話ができるというようなフィクションを設定すれば、問題なく二格標示できる。本文の制約は「動物扱いされる動物」に関する制約である。
12. 「太郎が窓を開ける」場合にも、行為者(太郎)が意志を持って自分の体を動かすので、「内的」な働きかけがあるはずである。しかし、それは「開ける」の語彙的意味の中には含まれないと考える。「踊る」場合、行為者の自分自身への内的働きかけは「踊る」ことの真理条件に関わる。つまり、自分の体の動かし方によっては太郎は踊ったことにならないかもしれない。対して「窓を開ける」場合、太郎が自分の体をどう動かそうとも(例えば手で開けようが足で開けようが)、窓を開けることができる。「窓を開ける」場合は、太郎が窓にどう働きかけるか、という外的な働きかけのみが真理条件に関わる。

13. もちろん、Vt の表す行為が行為者自身に向かうことも起こりえる。
- (i) 太郎が 自分を 責めた。
- 外的な働きかけはどこにでも向かうことが可能であり、その可能性の中には行為者自身も含まれる。(i) の場合には Vt の意味が変質して内的な働きかけを表す、ということではない。
14. 被使役者が「いやいや何かを行う」という意志もこれに含まれる (e.g. (27a))。その場合も被使役者が自分の体をしかるべく動かす意志を持つはずだからである。

[参考文献]

- Barker, Chris (2000) "Definite Possessives and Discourse Novelty," *Theoretical Linguistics* 26, 211-227.
- Bergeton, Uffe (2004) *The Independence of Binding and Intensification*, PhD dissertation, USC.
- Burzio, Luigi (1986) *Italian Syntax: A Government-Binding Approach*. Reidel, Dordrecht.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*. MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Chomsky, Noam (2001) "Derivation by Phase," in M. Kenstowicz (ed.), *Ken Hale: A Life in Language*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts, pp.1-52.
- Hale, Kenneth and Samuel Jay Keyser (1993) "On Argument Structure and the Lexical Expression of Syntactic Relations," in K. Hale and S. J. Keyser (eds.), *The View from Building 20: Essays in Honor of Sylvain Bromberger*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts, pp.53-110.
- 長谷川信子 (1999) 『生成日本語学入門』. 大修館、東京.
- 井上和子、原田かつ子、阿部泰明 (1999) 『生成言語学入門』. 大修館、東京.
- Kayne, Richard S. (1993) "Toward a Modular Theory of Auxiliary Selection," *Studia Linguistica* 47, 3-31.
- Kuno, Susumu (1973) *The Structure of the Japanese Language*. MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Kuroda, Shige-Yuki (1993) "Lexical and Productive Causatives in Japanese: An Explanation of the Theory of Paradigmatic Structure," *Journal of Japanese Linguistics* 15, 1-81.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Interface*. MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Miyagawa, Shigeru (1989) *Syntax and Semantics 22: Structure and Case Marking in Japanese*. Academic Press, San Diego.
- Miyagawa, Shigeru (1999) "Causatives," in N. Tsujimura (ed.), *The Handbook of Japanese Linguistics*, Blackwell, Malden, Massachusetts, pp. 236-268.
- Reinhart, Tanya and Eric Reuland (1993) "Reflexivity," *Linguistic Inquiry* 24, 657-720.
- Shibatani, Masayoshi (1976) "Causativization," in M. Shibatani (ed.), *Syntax and Semantics 5: Japanese Generative Grammar*, Academic Press, New York, pp. 239-294.
- Tonoike, Shigeo (1978) "On the Causative Constructions in Japanese," in J. Hinds and I. Howard (eds.), *Problems in Japanese Syntax and Semantics*, Kaitakusha, Tokyo, pp. 3-29

Unergatives as Transitives and Causative Constructions in Japanese

Akiko Kobayashi (Shimane University)
akiko.kobayashi.2005@soc.shimane-u.ac.jp

This paper provides a simple analysis of Japanese causative constructions. The two types of case frames reflect the following two types of embedding:

- (i) a. Causer [_{VP} Causee-*ni* [_{VP} ... V] *v*] -(s)ase_[+Dat]
 b. Causer [_{VP} Causee-*o* ... V] -(s)ase_[+Acc]

Causative morpheme *-(s)ase* that embeds *vP* assigns dative *-ni*, while VP-taking *-(s)ase* assigns accusative *-o* to the cause argument. This analysis explains why only *ni*-causatives are allowed for transitive-stem causatives ((1a)), and why only *o*-causatives are allowed for unaccusative-stem ones ((1b)).

To make it possible to apply the same explanation to unergatives, I propose a new structure of unergative verbs. That is, unergatives are “intrinsically-reflexive” transitives whose argument structures are (x, x). The internal argument, obligatorily bound by the external argument, must be realized as a special kind of reflexive pronoun. In Japanese, the special reflexive is a phonetically-null element (\emptyset). I also assume that an unergative can be unaccusativized (passivized). An unaccusativized verb only takes an internal argument, which is no longer “reflexive” by definition. Consequently, either *ni*- or *o*-causatives can be derived from unergative verbs.

- (ii) a. Causer [_{VP} Causee₁-*ni* [_{VP} \emptyset_1 ... V] *v*] -(s)ase_[+Dat]
 b. Causer [_{VP} Causee-*o* ... V] -(s)ase_[+Acc]

The extended projection of an unergative is *vP*. The *vP* is selected by dative-assigning *-(s)ase*, deriving *ni*-causative ((7a)). When the verb is unaccusativized, on the other hand, the VP is selected by accusative-assigning *-(s)ase*, deriving *o*-causative ((7b)).

The suggested analysis accounts for a wide range of syntactic phenomena observed in Japanese causative constructions, as discussed in section 2. In section 3 I consider the semantics of *ni*- and *o*-causatives. The popular dichotomy, i.e. *o*- as coercive vs. *ni*- as permissive causation, is not always correct ((26)-(28)). Moreover, it is observed that *ni*-marked causees must be human ((29)). I suggest that semantic interpretations be closely related to the syntactic structures, and that unergative-stem *ni*-causative sentences have a special interpretation since they involve “internal” causation from the agent to the agent him-/herself.



- (iii) Causer [_{VP} Causee₁-*ni* [_{VP} \emptyset_1 ... V] *v*] -(s)ase_[+Dat]

The causer, therefore, takes some action, whereby the causee comes to *have a will* to take up some other action. Animal causees cannot be marked with dative case, since we humans cannot work on animals to make them have such and such a will.

英語タイトル: Unergatives as Transitives and Causative Constructions in Japanese

著者: Akiko KOBAYASHI